聴覚・補聴器に関する生活者の意識

研究開発部　水野 映子

目次

1．高齢者の難聴をめぐる問題点 ……5
2．補聴器流通の現況 ……5
3．聴力相談にみる生活者の意識 ……6
4．聴覚・補聴器に関する意識調査 ……7
5．まとめ ……21
6．今後の課題 ……24

要旨

①筆者がこれまで実施した調査研究からは、高齢者を中心とする層が聴覚や補聴器に関して十分な情報を持っていないことによる問題点が浮かび上がってきた。そこで、高齢者およびプレ高齢者を対象とするアンケート調査を実施し、聴覚や補聴器に関する意識、知識などをたずねた。

②聴力検査を1年以内に受けた人は約3分の1、受けたことがない、または覚えていない人は約4分の1である。無職者、高年齢者、女性が聴力検査を受けていない傾向にある。また、約半数の人は職場の健康診断の際に聴力検査を受けている。仕事をしていない人が気軽に聴力検査を受けられる機会の増加が特に望まれる。

③補聴器専門店・技能者の認定制度や補聴器の公的交付制度について、知っている人は少ない。補聴器の具体的な入手方法はあまり知られていないといえる。また、老人性難聴の特徴に関する知識を持っている人も多くはない。

④補聴器の効果があると考える人は8割を超える一方、雑音があると思う人も約3分の2を占める。また、補聴器の値段が高いと感じている人も6割以上いる。一方、補聴器の効果、雑音、価格、デザインについてわからないと答える人も多い。

⑤聴力が低下しても補聴器を使用したくないという人は、約2割である。彼らは、補聴器に対する具体的イメージをあまり持っていない。補聴器に関する情報の少なさが補聴器使用を拒む一因になっているとも考えられる。

⑥補聴器に関する情報の媒体となっているのは、主に新聞・雑誌と身近な人からの話である。一方、医師・看護婦などから情報を得た人は、補聴器に関して幅広い知識を持っている。医療関係者などによる情報の普及が必要であると思われる。

キーワード：補聴器、聴力、老人性難聴

1．高齢者の難聴をめぐる問題点－過去の調査より－

高齢化の進展に伴い、難聴者、特に老人性難聴（年齢以外に原因のない難聴）の人々は増加していると予想される。彼らの不便さや不安は大きいと思われるにもかかわらず、その実態について明らかにされることは少ない。聴覚障害者と認定されるのは両耳の聴力レベルが70デシベル以上、すなわち重度の難聴者であり、70デシベル未満である中軽度の難聴者は統計的な数すら把握されていない。また、視覚や肢体など他の身体機能に関する問題に比べて、聴覚に関する問題は顕在化しにくく対応が遅れる傾向にある。

このような視点から、筆者は1999年12月に60～74歳の男女600人に対するアンケート調査（以下、「99年調査」）を実施し、高齢者の音声の聞き取りに関する問題点とその対応策に焦点を当てた。以下では、その結果の一部を紹介する。詳細は、既存の文献（水野：2000a・2000b・2002など）を参考にされたい。

（1）音声の聞き取りに関する問題点

さまざまな音声の中で、聞こえにくいと感じることがある（「よくある」＋「たまにある」）人の割合が高かったのは、「テレビの音声」（49.4％）、「電話の受話器から出る相手の声」（41.9％）などである。機械などの音よりも人間の話す声の聞き取りに特に問題があることがわかった。

また、自分自身の聞き取りだけでなく、同居家族など周囲の人の聞き取りに問題を感じている人が多い現状もあらわれた。例えば、同居者の「聞いているテレビの音が大きい」と答えた人は29.7％であった。

（2）補聴器に対する要望

「耳の聞こえにくい人に対して、どのようなサービスや製品があるとよいと思うか」という自由回答の設問に対しては、約300人が補聴器をあげた。そこで、補聴器のどのような点に対して要望があるか、という観点からこれらの回答を分類し集計した。

その結果、上位にあがったのは、性能（161件：例．雑音を少なくしてほしい、聞き取りやすくしてほしい）、価格（90件：例．安くしてほしい）、形状（65件：例．デザインを良くしてほしい、小さくしてほしい）などに対する要望である。回答の詳細をみると、現状の補聴器を改善して、より良い補聴器を提供してほしいと感じている人が多い。

2．補聴器流通の現況

次に、既存の文献・データから、補聴器流通の現状や仕組みなどについて概要を述べる。

（1）補聴器の出荷台数

補聴器関連企業の業界団体である全国補聴器メーカー協議会によると、2001年の参加企業14社の補聴器出荷台数は年間41万2,094台であり、年次推移をみると近

年では横ばい傾向にある（全国補聴器メーカー協議会 ホームページ
http://www.jhima.org/ 2002年4月1日採録)。

(2) 補聴器の技能者・専門店の認定制度

補聴器を販売する上で必須な資格は特にないが、(財) テクノエイド協会は旧厚生省の諮問機関の答申を受け、補聴器販売者の資質向上を目的に「認定補聴器技能者」という認定資格制度を1993年に制定した。この資格を取得できるのは、同協会が実施する「認定補聴器技能者試験」に合格した者であり、この試験を受けるためには一定の講習会の修了および実務経験が必要とされる。認定補聴器技能者試験には、1993年度から2000年度までに730人が合格している。

また、補聴器販売店に対しては、「認定補聴器専門店」の認定制度がある。認定条件には、前述の認定補聴器技能者の常駐などがあり、全国補聴器専門店認定協会によって審査される。1995年度から2001年度の間に、357店が認定補聴器専門店として認定されている（全国補聴器メーカー協議会 ホームページ（前述)、(財) テクノエイド協会 ホームページ
http://www.techno-aids.or.jp/ 2002年4月1日採録)。

(3) 補聴器の給付制度

補聴器の給付制度は、身体障害者福祉法、厚生年金保険法、労働者災害補償保険法などの法律に定められている。例えば、身体障害者福祉法の下では、聴覚障害者であれば、所定の手続きの後、補装具として補聴器の交付（または修理）を受けることができる。

(4) 補聴器の効果とフィッティング

補聴器を入手する際には、耳鼻咽喉科医などが聴力検査をおこない、使用者の聴力や環境に適合するよう補聴器を選択、調整（フィッティング）し、さらには入手後も何度か微調整をした方がよいとされている。補聴器の効果を得られない使用者の場合、補聴器が合っていない可能性がある。

また、フィッティングの良し悪しだけではなく、補聴器の使用場面や使用環境、難聴の程度や種類などによっても、補聴器の効果は異なる。したがって、高価・高性能の補聴器であっても、その効果には限界がある場合もある。

3．聴力相談にみる生活者の意識

(1) 聴力相談の目的と方法

人々が、聴覚に関してどのような問題を持っているかを深く探るため、専門家の協力を得て聴力相談を実施し、聴覚に関して感じていることなどを相談者に自由に話してもらった。同時に、実際の聴力との関係も参考にするため、聴力検査もおこなった。実施時期は2001年5月～6月である。

相談者は、当研究所の生活調査モニターとして登録している首都圏在住の人々を中心とする19人である。相談者の良聴耳（聴力が良い側の耳）の平均聴力レベル（6分法）[*1]は8～62デシベル、平均年齢

は67.1歳であった。

（2）聴力相談の結果と示唆

相談者のほとんどは、自分の聴力に関して不安を感じている。一方、彼らが自分の聴力について知ったり聴覚に関する知識を得たりする機会は少ない。特に、仕事をしていない人（退職者や専業主婦など）は、健康診断で聴力検査を受ける機会もあまりない。また、職場の健康診断においても、通常はそれほど丁寧な聴力検査を受けられない。病院に行った場合でも、患者が時間をかけて説明を受けることは少ない。そのため、聴力に関する不安を解消することができず、問題が潜在化してしまうのではないかと思われた。

また、相談者の中には、補聴器を入手したにもかかわらず効果を感じられなかったため使用しなくなったという人が数人いた。いずれのケースも、専門家によるアドバイスを十分得られないまま聴力に合わない補聴器を購入したことが、活用していない背景にあると考えられた。

4．聴覚・補聴器に関する意識調査

（1）調査の目的

以上の点をふまえ、生活者に対して聴覚・補聴器に関するアンケート調査を実施することとした。以下では、調査の主な目的を述べる。

99年調査においては、高齢者には音声の聞き取りに関するさまざまな問題があることが明らかになった。また、聴力相談では、自分の聴力についてよくわからないことが不安を増大させたり、問題解決を遅らせたりしていることが示唆された。そこで、アンケート調査では、聴力検査の実施状況を把握し、聴力を知る機会がどの程度あるのかを明らかにするとともに、その重要性について検討することを第一の目的とする。

一方、音声の聞き取りに関する問題を解決する一手段としての補聴器に対しては、性能、価格、形状などの面で改善してほしいという要望が強いことが99年調査でわかった。これらの要望の背景にある補聴器に対する否定的なイメージは、現在・将来の補聴器使用の意向に影響を与えていると思われた。また聴力相談では、補聴器を入手したにもかかわらず現在は使っていないという事例がみられ、その一因が補聴器の入手・選択方法に関する情報の不足にあると推測された。そこで、アンケート調査では、生活者の補聴器に関するイメージや知識を明らかにし、補聴器の理解や正しい選択・使用を阻害している要因を探ることを第二の目的とする。

それらの結果から、聴覚に関する問題を解決するための情報や補聴器の選択・使用に資する情報の提供を促進するための課題について検討することを、最終的な目的とする。

（2）調査の方法

アンケート調査の対象者は、全国の50～74歳の男女1,000人であり、当研究所の生活調査モニターの中から抽出した。対

象者を50歳以上としたのは、高齢者と、近く高齢期を迎える人々（プレ高齢者）とを比較するためである。

有効回収数は971人、有効回答率は97.1%である（年齢が不明な回答者は無効とした）。調査時期は2001年11月であり、郵送により調査票を配布・回収した。

なお、上記の調査対象者のほかに、20～29歳の男女100人にも調査を実施した。有効回収数は97人、有効回答率は97.0%であり、結果は参考値として掲載する。以下の文中や図表中で、「全体」という場合には、50～74歳の回答者を指す。

(3) 回答者の属性

回答者の性別、年齢層別、職業別の構成を図表1に示す。

(4) 聴力の主観的評価

調査対象者の聴力に対して本人や周囲の人がどのように評価しているかをたずねるため、次の4つの質問を設けた（図表2）。

「自分の聴力についてどのように感じるか」という質問では、「ほとんど聞こえない」（0.1%）、「かなり聞こえにくい」（2.3%）、「やや聞こえにくい」（29.2%）が合わせて約3分の1を占める。

「音は聞こえるのに言葉を聞き取りにく

図表1　回答者の属性構成

		%	人	
性別	男性	49.6	482	
	女性	50.4	489	
年齢層別	50代前半	20.1	195	
	50代後半	19.9	193	
	60代前半	20.6	200	
	60代後半	20.7	201	
	70代前半	18.7	182	
職業別	正規の社員、従業員	16.5	160	有職
	非常勤、嘱託、パートタイマー	16.4	159	有職
	自営業、自由業、家族従業者	10.3	100	有職
	その他	2.0	19	有職
	収入のある仕事はしていない	54.7	531	無職
	無回答	0.2	2	

いと感じることがどの程度あるか」という質問では、「よくある」（7.9%）、「たまにある」（49.9%）を合わせると過半数となる。

「テレビの音声を聞き取りにくいと感じることがどの程度あるか」という質問では、「よくある」（5.8%）、「たまにある」（41.7%）を合わせると半数近くになる。

以上の3問は、調査対象者本人による聴力の評価であるが、他人による評価の指標として「身近な人から自分の耳の聞こえが悪いのではないかと言われることがあるか」という質問も設けた。これに対しては、「よくある」（3.9%）、「たまにある」（29.1%）が合わせて約3分の1となった。

これらの質問を年齢層別にみた結果については、（5）③で述べる。

（5）聴力検査の実施状況

①聴力検査の時期

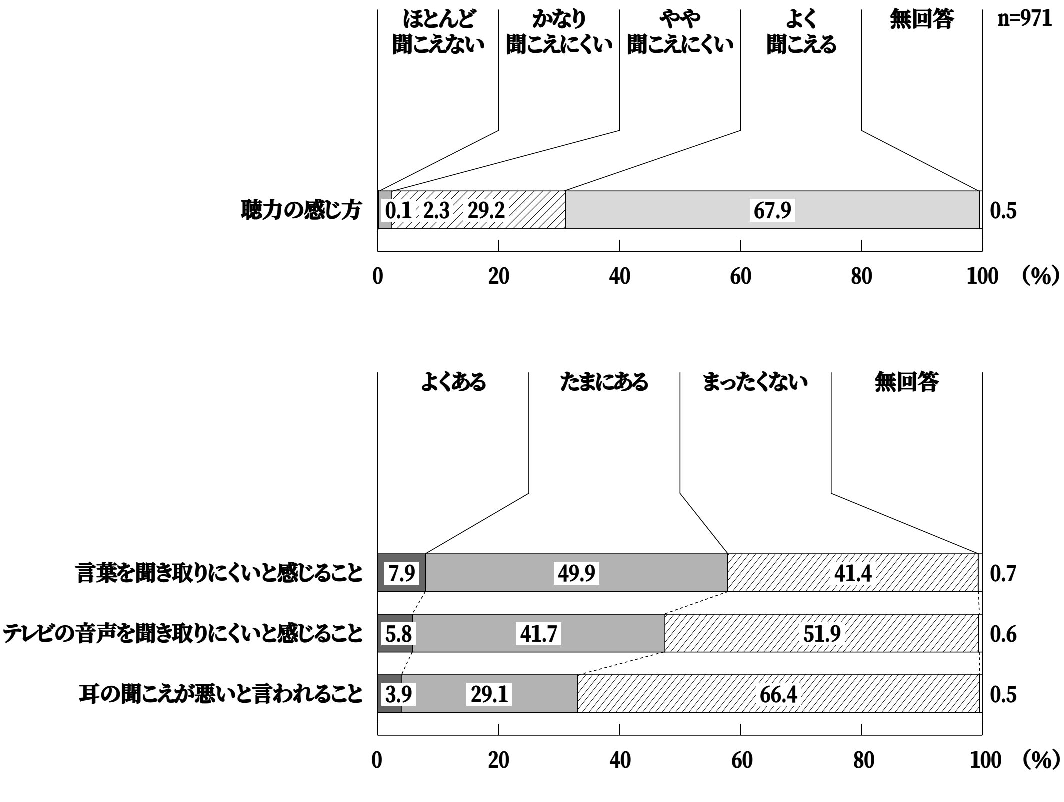
最近いつ聴力検査を受けたかをたずねた（図表3）。

全体をみると、「1年以内」（35.3%）が最も高く、次が「5年以内」（22.5%）である。

性別にみると、「1年以内」は女性（25.6%）より男性（45.2%）の方が20ポイント近く高い。一方、「覚えていない」「聴力検査をしたことはない」は女性の方が高い。

年齢層別にみると、「1年以内」は65～

図表2　聴力の主観的評価（全体）



74歳（22.7%）より50～64歳（43.5%）の方が20ポイント以上高い。また65～74歳では「聴力検査をしたことはない」が26.4%を占める。

職業の有無別にみると、「1年以内」は無職（23.5%）より有職（49.8%）の方が20ポイント以上高い。

②聴力検査の機会

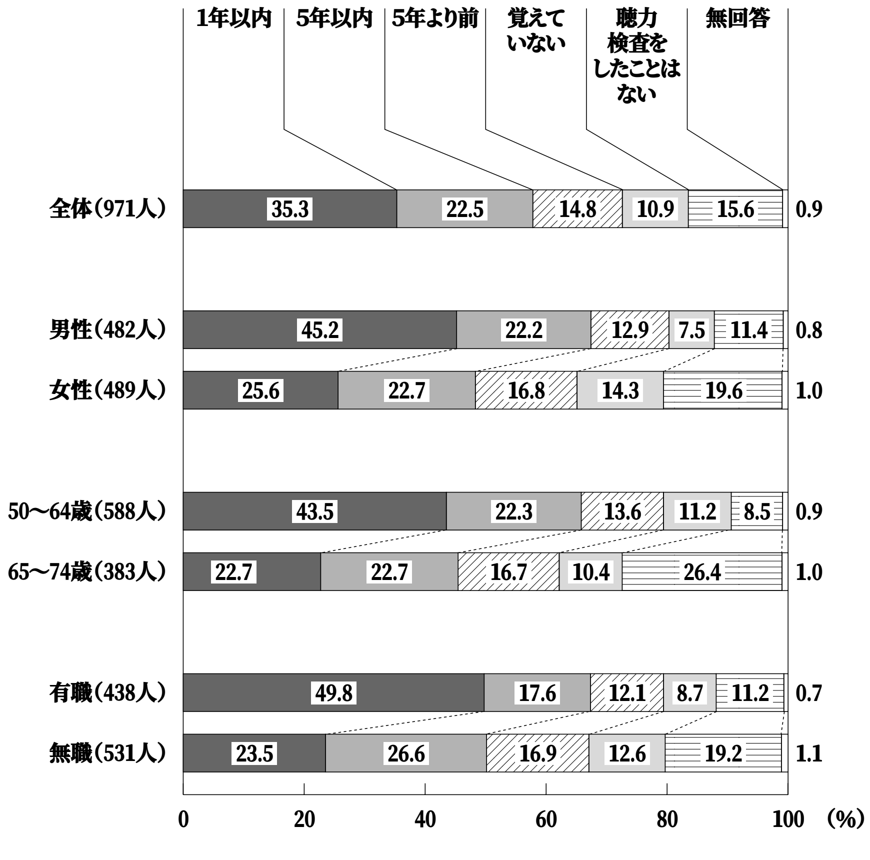
聴力検査を受けたことがある人（前問で聴力検査を「1年以内」「5年以内」「5年より前」に受けたと答えた人）に対し、どのような機会に聴力検査を受けたかをたずねた（図表4）。

全体をみると、「職場の健康診断」（45.5%）が最も高く、次が「耳鼻咽喉科を受診したとき」（23.4%）である。「その他の機会」（19.4%）の約4分の3は人間ドックである。

性別にみると、男性では「職場の健康診断」（61.0%）が群を抜いているのに対し、女性では「耳鼻咽喉科を受診したとき」（35.5%）が最も高く、「職場の健康診断」（26.7%）、「その他の機会」（22.3%）にも分散している。

年齢層別にみると、50～64歳では「職場の健康診断」（55.0%）が過半数を占めるのに対し、65～74歳では「耳鼻咽喉科を受診したとき」（34.9%）が最も高い。

図表3　聴力検査の時期（全体・性別・年齢層別・職業の有無別）



注：「5年より前」は「10年以内」（8.3%）と「10年より前」（6.5%）の合計

職業の有無別にみると、有職では「職場の健康診断」（63.2％）の割合が圧倒的であるのに対し、無職では「耳鼻咽喉科を受診したとき」（30.9％）が最も高い。

③聴力検査の診断結果

同じく、聴力検査を受けたことがある人に対し、どのように診断されたかをたずねた（図表5）。

全体をみると、「両耳とも正常」（74.9％）が約4分の3を占めている。「片耳のみ異常」は13.9％、「両耳とも異常」は5.4％である。

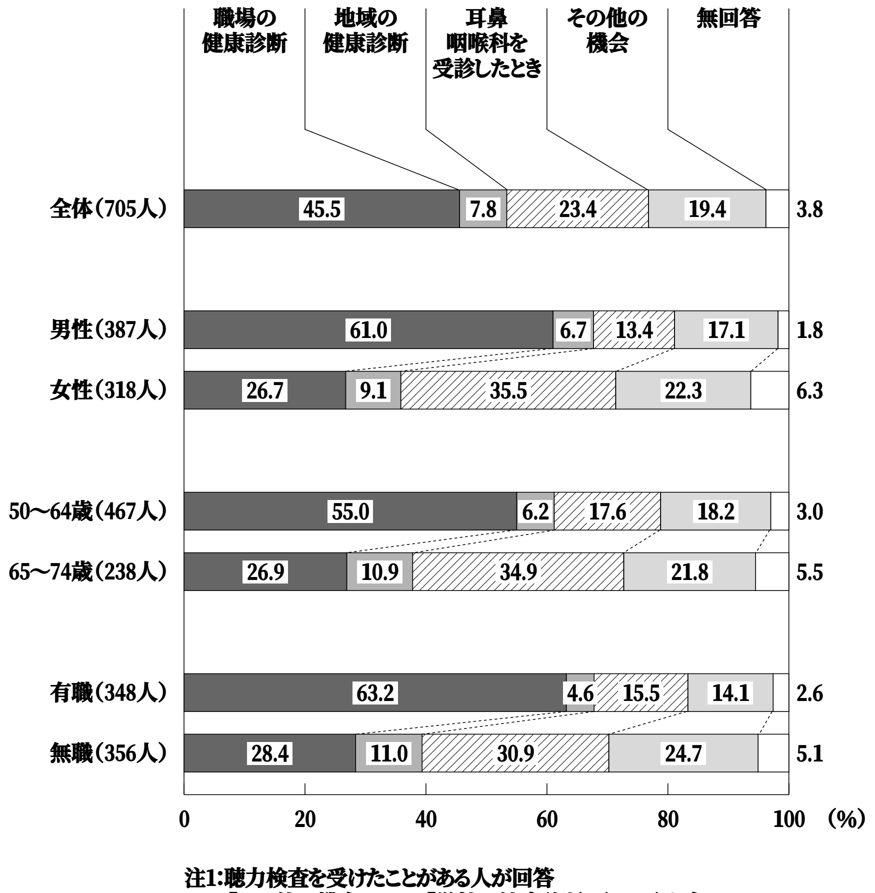
聴力の感じ方別にみると、聞こえにくいと感じる人ほど、「両耳とも正常」の割合が低く、「片耳のみ異常」「両耳とも異常」の割合が高くなる。

耳の聞こえが悪いと言われる程度別にみた場合も同様に、その程度が高い人ほど「両耳とも正常」の割合が低く、「片耳のみ異常」「両耳とも異常」の割合が高くなる。

ここで、聴力検査の診断結果、すなわち聴力の客観的評価を、（4）で述べた聴力の主観的評価と比較しながら、年齢層別に分析する（図表6）。

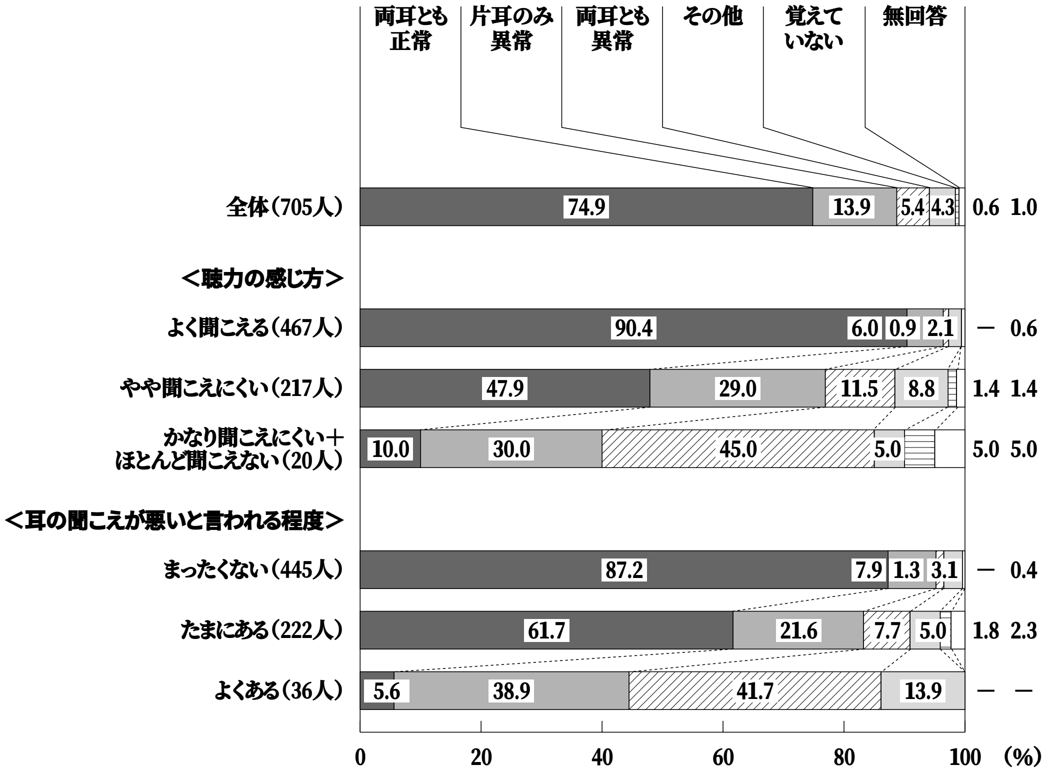
聴力検査で「両耳とも正常」と診断された割合は、50代前半（84.0％）、50代後半（85.9％）ではほとんど違いがないの

図表4　聴力検査の機会（全体・性別・年齢層別・職業の有無別）



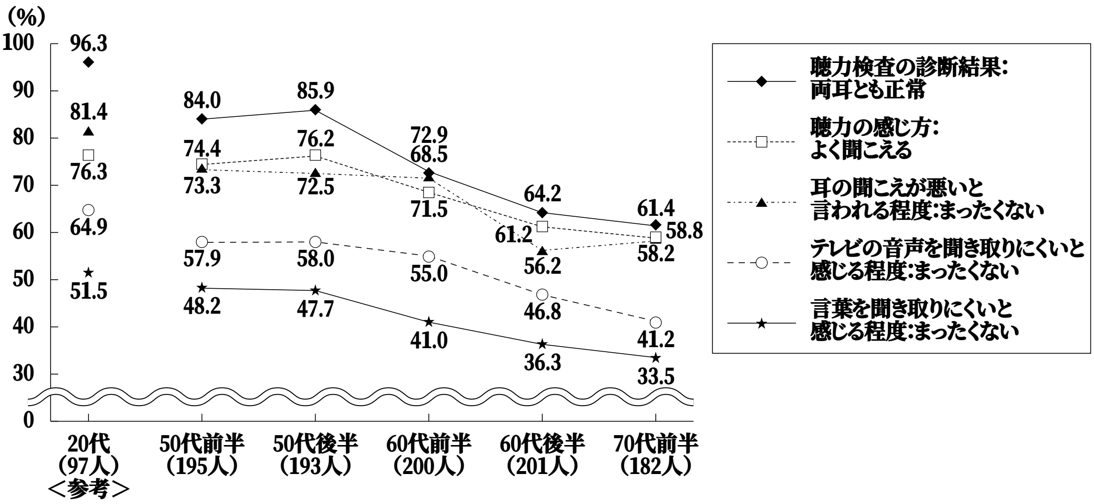
注1:聴力検査を受けたことがある人が回答
2:「その他の機会」には、「学校の健康診断」（1.6％）を含む

図表5　聴力検査の診断結果（全体・聴力の感じ方別・耳の聞こえが悪いと言われる程度別）



注：聴力検査を受けたことがある人が回答

図表6　聴力検査の診断結果、聴力の主観的評価（年齢層別）



注：「聴力検査の診断結果」には、聴力検査を受けたことがある人のみが回答している

に対し、60代前半から徐々に低くなり70代前半では61.4%になる。

同様に、自分の聴力について「よく聞こえる」と答えた割合、言葉を聞き取りにくいと感じることが「まったくない」と答えた割合も、60代前半から低くなる。

テレビの音声を聞き取りにくいと感じることが「まったくない」と答えた割合は、50～64歳では6割弱であまり差がないが、60代後半から低くなり70代後半では41.2%となる。

耳の聞こえが悪いと言われることが「まったくない」と答えた割合は、50～64歳では7割強であるのに対し、65～74歳では6割弱であり、両者に大きな差がある。

20代と50代とを比べると、聴力の感じ方はあまり違わないが、聴力検査の結果ではかなり差がある。

図表7　補聴器使用の経験・必要性・意向（全体・性別・年齢層別・聴力の感じ方別）

		回答者数（人）	補聴器使用の経験（%）			回答者数（人）	補聴器使用の必要性（%）			補聴器使用の意向（%）		
			現在使っている	使ったことはあるが、現在は使っていない※	使ったことはない※		よくある	たまにある	まったくない	現在、使用を検討している	聴力が低下したら、使用を検討したい	聴力が低下しても、使用したくない
全体		971	1.0	1.1	96.5	948	0.6	8.0	89.2	0.9	76.9	19.6
性別	男性	482	1.0	0.8	96.9	471	1.1	10.0	86.6	1.3	77.9	17.8
	女性	489	1.0	1.4	96.1	489	0.2	6.1	91.8	0.6	75.9	21.4
年齢層別	20代＜参考＞	97	—	1.0	99.0	97	—	1.0	99.0	—	78.4	21.6
	50代前半	195	1.0	—	97.9	191	0.5	3.7	94.2	0.5	78.5	19.4
	50代後半	193	0.5	1.0	97.4	190	1.6	5.3	89.5	1.6	78.4	16.3
	60代前半	200	0.5	1.0	97.0	196	—	4.6	93.4	—	79.6	18.4
	60代後半	201	2.0	1.0	95.0	193	1.0	13.0	83.4	2.1	75.6	19.2
	70代前半	182	1.1	2.7	95.1	178	—	14.0	85.4	0.6	71.9	25.3
聴力の感じ方別	よく聞こえる	659	—	—	98.6	650	—	0.3	97.2	—	78.3	18.5
	やや聞こえにくい	284	2.1	2.8	94.7	277	0.7	23.5	74.4	1.8	75.5	21.7
	かなり聞こえにくい＋ほとんど聞こえない	23	17.4	13.0	69.6	19	21.1	47.4	31.6	21.1	47.4	31.6

※に答えた人が回答

注:無回答の結果は割愛

(6) 補聴器使用の現状・意向

①補聴器使用の経験

補聴器をこれまでに使ったことがあるかどうかをたずねた（図表7)。

全体をみると、「現在使っている」は1.0%、「使ったことはあるが、現在は使っていない」は1.1%であり、使ったことのある人の中では現在使っている人よりも使っていない人の方がわずかに上回っている。

年齢層別にみると、使ったことがある(「現在使っている」＋「使ったことはあるが、現在は使っていない」）割合は、年齢が上がるにつれてやや高くなる。

②補聴器使用の必要性

前問で、補聴器を現在使っていない(「使ったことはあるが、現在は使っていない」または「使ったことはない」）と答えた人に対し、補聴器を使う必要性をどの程度感じるかたずねた。

全体をみると、必要性を感じることがある（「よくある」＋「たまにある」）割合は8.6%を占める。

年齢層別にみると、必要性を感じることがある割合は、60代後半以降で高く、60代後半、70代前半でともに14.0%を占める。

③補聴器使用の意向

前問と同様、補聴器を現在使っていない人に対し、今後補聴器を使いたいと思うかどうかをたずねた。

全体をみると、「現在、使用を検討している」割合は0.9%、「聴力が低下したら、使用を検討したい」割合は76.9%、「聴力が低下しても、使用したくない」割合は19.6%である。

性別にみると、「聴力が低下しても、使用したくない」割合は男性（17.8%）に比べ女性（21.4%）の方がやや高い。

年齢層別にみると、「聴力が低下しても、使用したくない」割合は70代前半(25.3%）でやや高い。

聴力の感じ方別にみると、「かなり聞こえにくい＋ほとんど聞こえない」人では、「現在、使用を検討している」（21.1%）と「聴力が低下しても、使用したくない」(31.6%）の両方の割合が高い。

④身近な補聴器使用者

周囲の人の補聴器使用状況を知るため、身近で補聴器を使っている人がいるかどうかを複数回答でたずねた。図表8の通り、「友人・知人」（12.9%)、「親」（11.2%)、「近所の人」（10.5%）の割合が高い。「身近にはいない」は56.2%であり、4割強の人の周囲には補聴器を使っている人がいることがわかる。

(7) 補聴器等に関する知識

①補聴器に関する情報の媒体

補聴器に関する情報をどのような媒体で見聞きしたことがあるかを複数回答でたずねた。図表9の通り、「新聞・雑誌の広告」（64.8%）が群を抜いており、次に「新聞・雑誌の記事」（48.8%)、「家族・友人などからの話」（35.6%)、「新聞の折り込みチラシ」（29.6%）となっている。

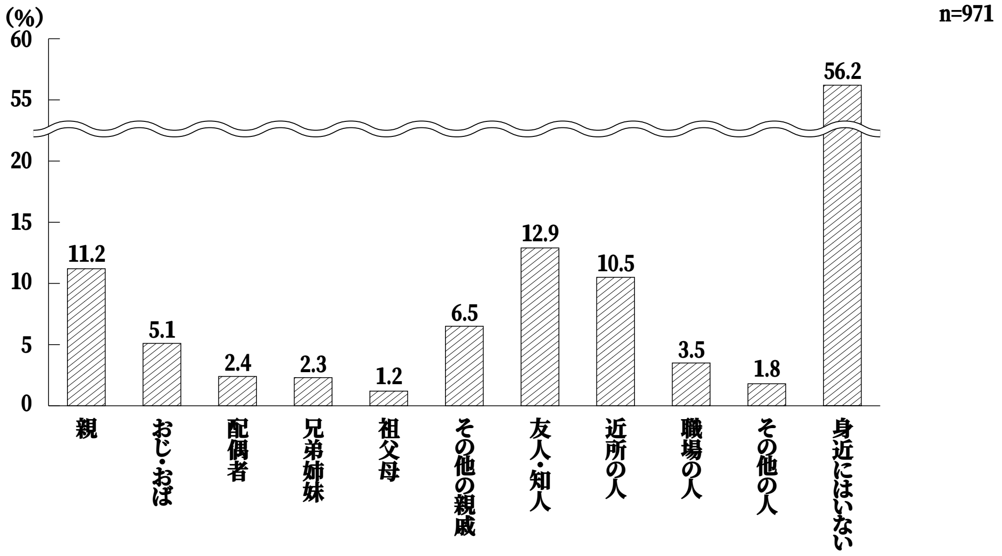
②補聴器・老人性難聴に関する知識

補聴器に関する9項目、および老人性難聴に関する3項目について、「知っている」「知らない」のどちらであるかをたずねた。

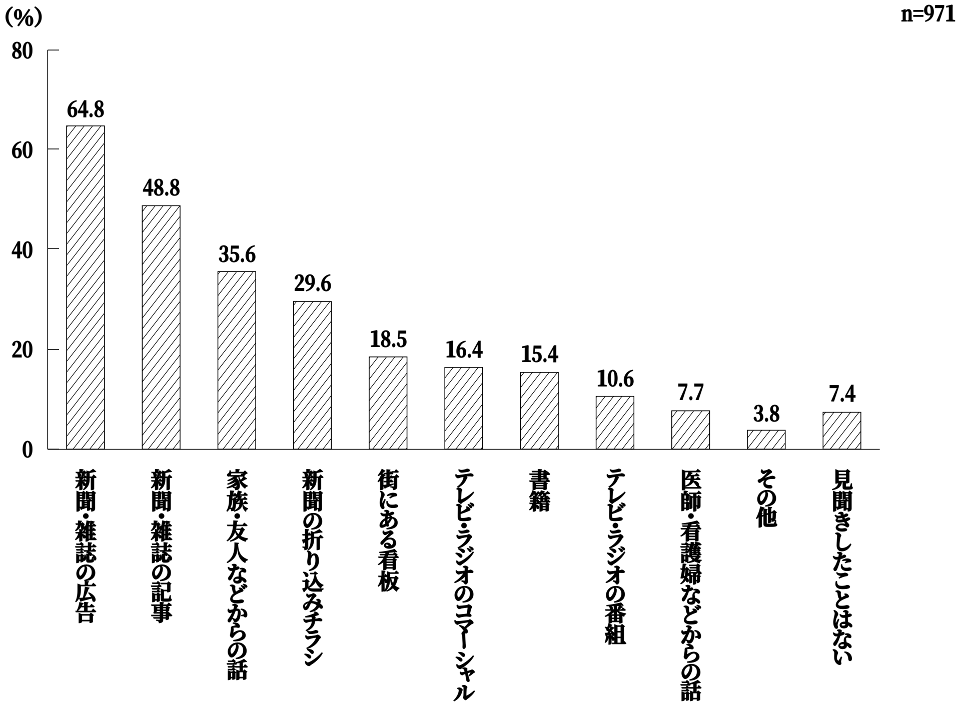
全体をみると（図表10)、補聴器の選択・入手に関する項目の中で、「補聴器を

買う前には、聴力検査をしてもらった方がよい」(90.3%)、「補聴器を買うときには、補聴器を耳に合わせて調整してもらった方がよい」(85.3%)については、大多数の人が知っていると答えている。それに比べると、「補聴器を買ってしばらくした後には、補聴器が耳に合っているかを点検してもらった方がよい」(76.4%)

図表8　身近な補聴器使用者＜複数回答＞(全体)



図表9　補聴器に関する情報の媒体＜複数回答＞(全体)



について知っている割合はやや低い。

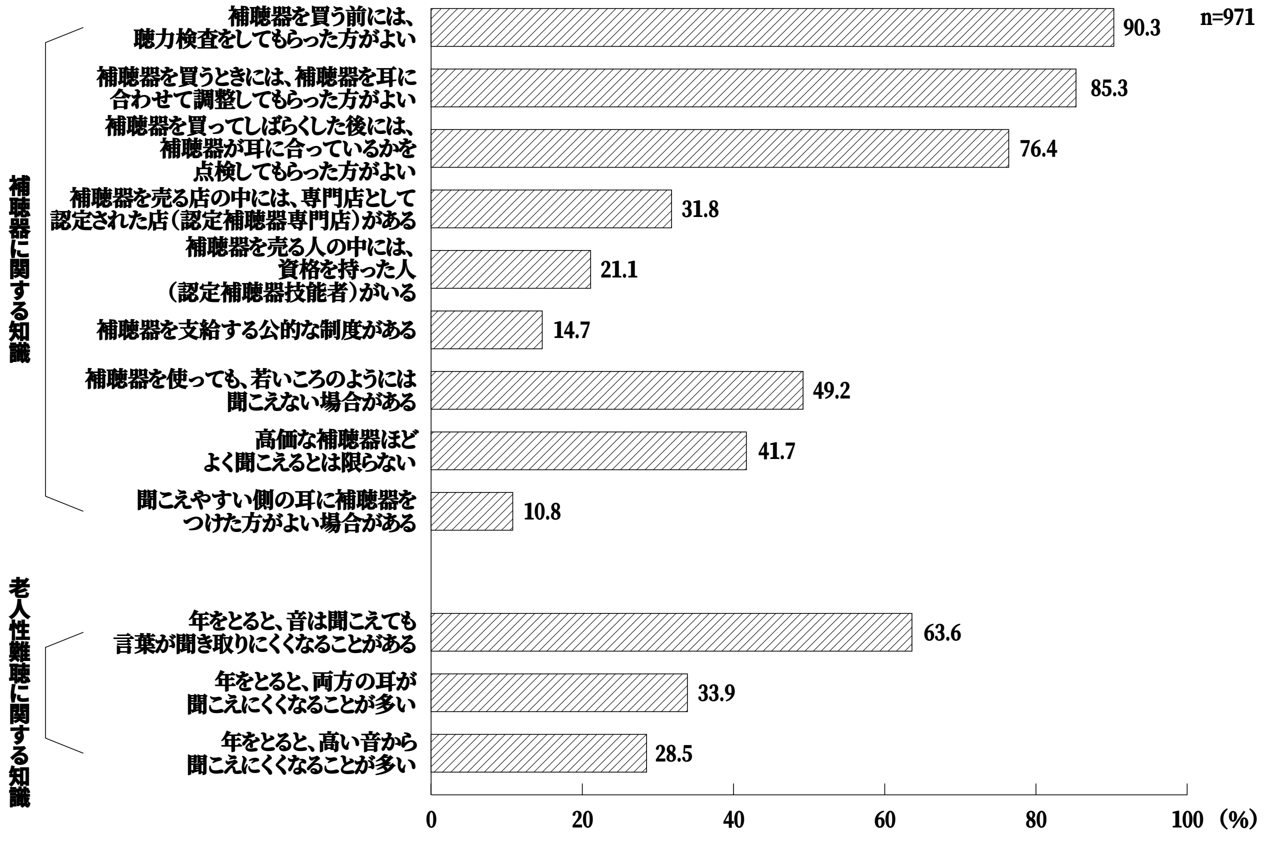
一方、「補聴器を売る店の中には、専門店として認定された店（認定補聴器専門店）がある」（31.8%）、「補聴器を売る人の中には、資格を持った人（認定補聴器技能者）がいる」（21.1%）について知っている割合はかなり低い。「補聴器を支給する公的な制度がある」（14.7%）について知っている割合はさらに低い。

補聴器の効果に関する項目では、「補聴器を使っても、若いころのようには聞こえない場合がある」（49.2%）、「高価な補聴器ほどよく聞こえるとは限らない」（41.7%）について知っている割合は半数に満たない。「聞こえやすい側の耳に補聴器をつけた方がよい場合がある」（10.8%）について知っている割合は1割余りである。

老人性難聴に関する項目では、「年をとると、音は聞こえても言葉が聞き取りにくくなることがある」（63.6%）について知っている割合は6割強であったが、「年をとると、両方の耳が聞こえにくくなることが多い」（33.9%）、「年をとると、高い音から聞こえにくくなることが多い」（28.5%）について知っている割合はそれぞれ3割前後であった。

次に、「家族・友人などからの話」や「医師・看護婦などからの話」で補聴器に関する情報を得た経験の有無別にみると

図表10　補聴器・老人性難聴に関する知識（全体）



注：「知っている」と答えた人の割合

（図表11)、「家族・友人などからの話」で情報を得たことのある人はない人に比べ、「補聴器を使っても、若いころのようには聞こえない場合がある」「高価な補聴器ほどよく聞こえるとは限らない」について知っている割合が10ポイント以上高い。一方、「医師・看護婦などからの話」で情報を得たことのある人はない人に比べ、ほとんどの項目について知っている割合が10ポイント以上高い。

③補聴器のタイプの認知

4つのタイプの補聴器（耳かけ形、耳穴形、箱形、メガネ形）について、それぞれ「知っている」「知らない」のどちらであるかをたずねた。「知っている」と答えた割合は、高い順に「耳かけ形」(76.7%)、「耳穴形」(72.6%)、「箱形」(47.6%)、「メガネ形」(26.5%）の順となっている。出荷台数が最も多い「耳穴形」(21万877台）は次に多い「耳かけ形」(14万4,645台）よりも知られていないことがわかる(出荷台数のデータは前述の全国補聴器メーカー協議会のホームページより)。

図表11　補聴器・老人性難聴に関する知識
(「家族・友人などからの話」「医師・看護婦などからの話」で補聴器に関する情報を得た経験の有無別)

(単位:%)

		家族・友人などからの話			医師・看護婦などからの話		
		ある(346人)		ない(625人)	ある(75人)		ない(896人)
補聴器に関する知識	補聴器を買う前には、聴力検査をしてもらった方がよい	93.6	>	88.5	97.3	>	89.7
	補聴器を買うときには、補聴器を耳に合わせて調整してもらった方がよい	90.2	>	82.6	92.0	>	84.7
	補聴器を買ってしばらくした後には、補聴器が耳に合っているかを点検してもらった方がよい	80.9	>	73.9	90.7	＞	75.2
	補聴器を売る店の中には、専門店として認定された店(認定補聴器専門店)がある	37.6	>	28.6	56.0	＞	29.8
	補聴器を売る人の中には、資格を持った人(認定補聴器技能者)がいる	25.7		18.6	34.7	＞	20.0
	補聴器を支給する公的な制度がある	17.3		13.3	32.0	＞	13.3
	補聴器を使っても、若いころのようには聞こえない場合がある	61.8	＞	42.2	72.0	＞	47.3
	高価な補聴器ほどよく聞こえるとは限らない	51.2	＞	36.5	68.0	＞	39.5
	聞こえやすい側の耳に補聴器をつけた方がよい場合がある	12.4		9.9	26.7	＞	9.5
老人性難聴に関する知識	年をとると、音は聞こえても言葉が聞き取りにくくなることがある	68.8	>	60.8	84.0	＞	61.9
	年をとると、両方の耳が聞こえにくくなることが多い	33.8		33.9	49.3	＞	32.6
	年をとると、高い音から聞こえにくくなることが多い	26.6		29.6	46.7	＞	27.0

注1:「知っている」と答えた人の割合
　2:不等号(大)はポイント差が10ポイント以上の場合、不等号(小)はポイント差が10ポイント未満5ポイント以上の場合

（8）補聴器に対するイメージ

①補聴器に対する評価

1（2）で述べた通り、99年調査であげられた補聴器に対する要望は主に性能、価格、形状に関するものであった。このことから、今回の調査でも、性能に関しては「音を聞く効果」と「雑音」、価格に関しては「値段」、形状に関しては「デザイン」についてたずねた。

全体をみると（図表12）、音を聞く効果に対しては、ない（「ほとんどない」0.1%＋「あまりない」3.4%）と答えた人はほとんどおらず、ある（「かなりある」40.9%＋「ややある」39.0%）と答えた人が約8割を占める。

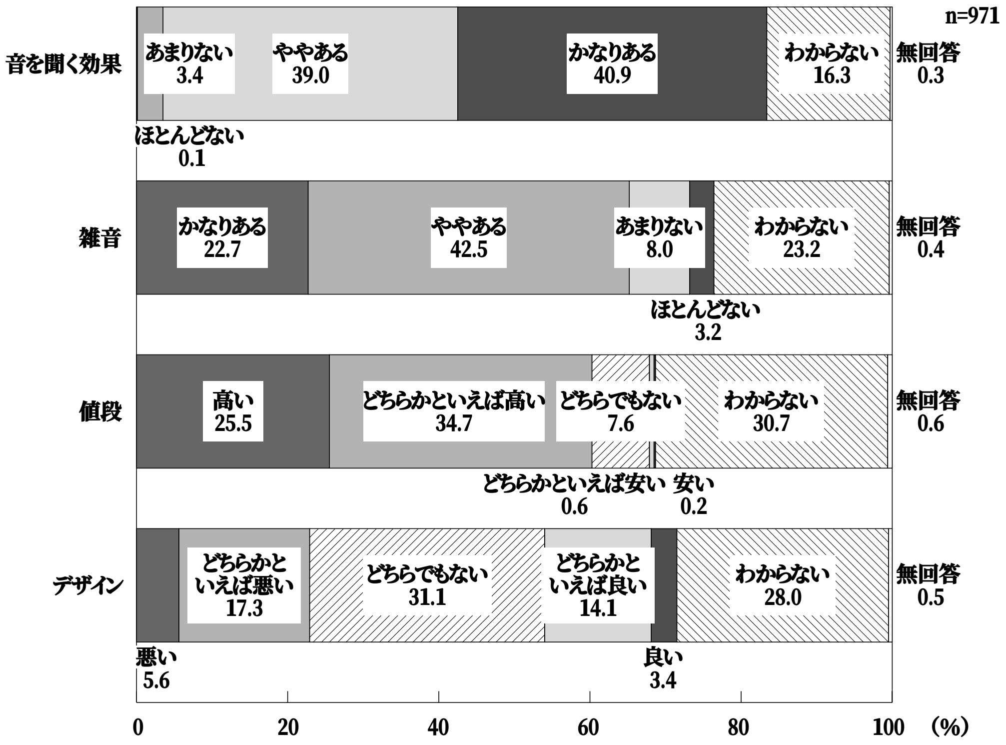
一方、雑音に対しては、ある（「かなりある」22.7%＋「ややある」42.5%）と答えた人が約3分の2となっている。

値段に対しては、高い（「高い」25.5%＋「どちらかといえば高い」34.7%）と答えた人が6割を超える。安い（「どちらかといえば安い」0.6%＋「安い」0.2%）と答えた人はほとんどいない。「わからない」（30.7%）と答えた人は3割を超えている。

デザインに対しては、悪い（「悪い」5.6%＋「どちらかといえば悪い」17.3%）と答えた人の方が、良い（「良い」3.4%＋「どちらかといえば良い」14.1%）と答えた人よりも多い。「わからない」（28.0%）、「どちらでもない」（31.1%）と答えた人は、それぞれ3割前後を占めている。

補聴器の使用意向別にみると（図表13）、使用意向のない人（「聴力が低下しても、使用したくない」と答えた人）は使用意

図表12　補聴器に対する評価（全体）



向のある人（「現在、使用を検討している」または「聴力が低下したら、使用を検討したい」と答えた人）よりも、音を聞く効果やデザインに対してはプラスの評価（音を聞く効果がある、デザインが良いという評価）が低い一方、雑音や値段に対してはマイナスの評価（雑音がある、値段が高いという評価）が低い。また、使用意向のない人はある人に比べ、どの評価項目でも「わからない」と答えた割合が高い。

②補聴器を使い始める年齢

一般に何歳くらいから補聴器を使うものだと思うかをたずねた（図表14)。

全体をみると、「60代以下」3.9%、「70代」28.8%、「80代以上」19.8%であり、70歳以上が半数近くを占める。「年齢には関係ない」（42.7%）と思っている割合も高い。

性別にみると、「年齢には関係ない」と答えた割合は、男性（37.6%）よりも女性（47.9%）の方が10ポイント以上高い。

図表13　補聴器に対する評価（補聴器の使用意向別）

（単位:%）

		意向あり（738人）	注2	意向なし（186人）
音を聞く効果	ない（あまりない＋ほとんどない）	2.7		5.9
	ある（かなりある＋ややある）	83.9	＞	64.5
	わからない	13.1	＜	29.6
雑音	ある（かなりある＋ややある）	66.4	>	61.3
	ない（あまりない＋ほとんどない）	11.1		9.7
	わからない	22.1	<	29.0
値段	高い（高い＋どちらかといえば高い）	61.4	>	54.3
	どちらでもない	8.1		4.8
	安い（安い＋どちらかといえば安い）	0.8		1.1
	わからない	29.1	＜	39.2
デザイン	悪い（悪い＋どちらかといえば悪い）	21.7	<	27.4
	良い（良い＋どちらかといえば良い）	18.7	>	11.8
	どちらでもない	33.1	＞	22.6
	わからない	26.0	＜	38.2

注1:「意向あり」は補聴器を「現在、使用を検討している」または「聴力が低下したら、使用を検討したい」と答えた人、
「意向なし」は「聴力が低下しても、使用したくない」と答えた人
2:図表11の注2と同じ
3:無回答の結果は割愛

年齢層別にみると、50～64歳の人の方が65～74歳の人より「70代」以下をあげる割合が高い。

補聴器の使用意向別にみると、使用意向のない人はある人より「70代」をあげる割合が低く、「80代以上」をあげる割合が高い。

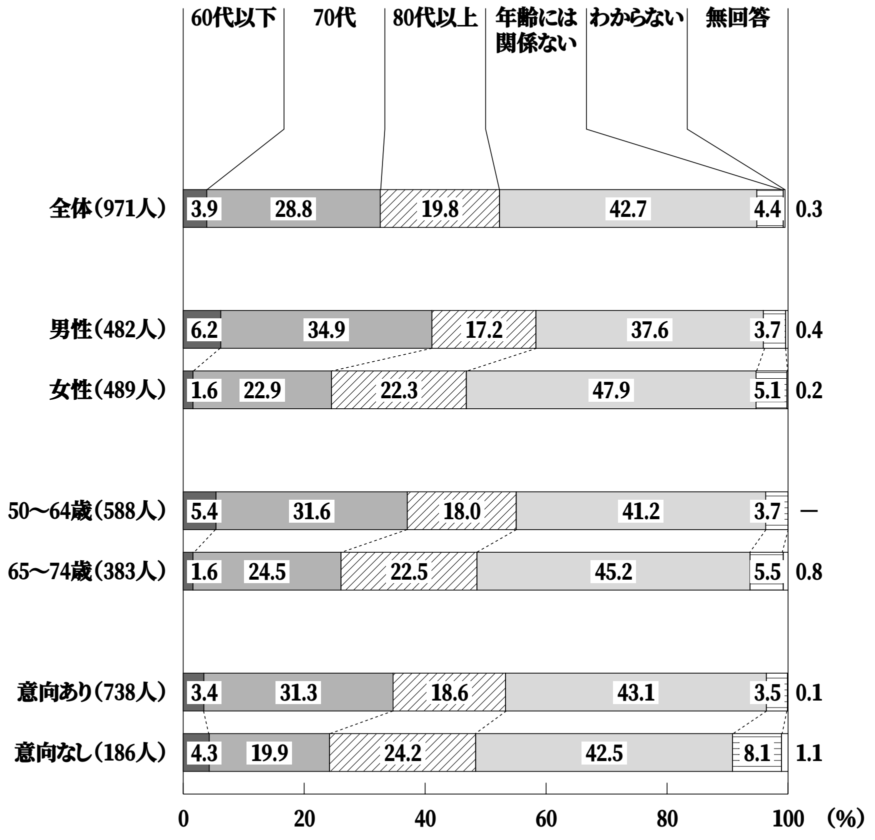
③補聴器の入手場所

補聴器をほしいと思ったらどこに行くか（これまでに既にほしいと思ったことのある人や買ったことのある人は、実際にどこに行ったか）をたずねた（図表15）。

全体をみると、「耳鼻咽喉科」（45.6%）が最も高く、次が「補聴器の専門店」（38.1%）である。この2項目以外の回答は少ない。

補聴器の使用経験別にみると、使用経験のある人（「現在使っている」または「使ったことはあるが、現在は使っていない」と答えた人）は使用経験のない人（「使ったことはない」と答えた人）に比べ、「補聴器の専門店」（61.9%）、「総合小売店」（19.0%）の割合が非常に高く、「耳鼻咽喉科」（9.5%）が1割未満と低い。

図表14　補聴器を使い始める年齢（全体・性別・年齢層別・補聴器の使用意向別）



注：「60代以下」は「50代」（0.5%）と「60代」（3.4%）の合計、「80代以上」は「80代」（19.6%）と「90代」（0.2%）の合計

5．まとめ

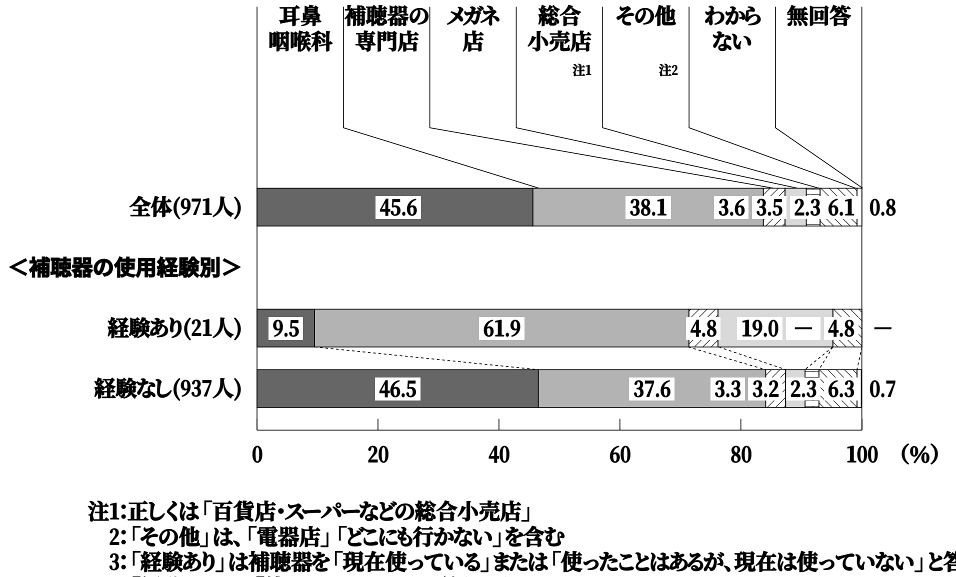
＜乏しい聴力検査の機会～自分の聴力を知ることは重要、しかしその機会は少ない＞

聴力相談では、自分の聴力について知る機会がないことによる問題が示唆された。そこで、アンケート調査では、聴力検査の実施状況をたずねたところ、1年以内にしたという人は約3分の1、したことがない、または覚えていないという人は約4分の1という結果になった。

属性別にみると、聴力検査をしたことがない人や最近していない人の割合は、女性、年配者、無職者で高い。また、聴力検査をどのような機会にしたかをみると、男性、プレ高齢者、有職者では、職場の健康診断が過半数を占めている。就業していない層は、職場の健康診断を受けられないために聴力検査の機会が少ないと推測できる。

聴力検査の結果と聴力の主観的評価との関連をみると、主観的評価が高い人は当然ながら聴力検査で正常と診断される率も高い。しかし、主観的評価が高い人の中にも、聴力検査で異常と診断される人は存在している。逆に、主観的評価が低くても、聴力検査では正常と診断される人も数多くいる。つまり、聴力検査などによって自分の聴力を客観的に知る機会のない人は、聴力が低いのに低くないと思い込んでしまったり、逆に聴力が低くないのに低いのではないかと杞憂したりする可能性がある。そういう人を少なくするためには、だれもが、特に仕事をしていない人が気軽に受けられる聴力検査の機会を増やすことが重要である。また、現状の聴力検査においては、正確な聴力を知ることのできる精密な検査の実

図表15　補聴器の入手場所（全体・補聴器の使用経験別）



注1:正しくは「百貨店・スーパーなどの総合小売店」
2:「その他」は、「電器店」「どこにも行かない」を含む
3:「経験あり」は補聴器を「現在使っている」または「使ったことはあるが、現在は使っていない」と答えた人、「経験なし」は「使ったことがない」と答えた人

施が望まれる。

なお、50代では、自分の聴力がよいと思っている人の割合は20代と同程度であったのに対し、聴力検査で正常と診断される割合は20代よりかなり低かった。50代くらいの層では加齢による聴力の変化に自分では気づかず、若いころと同程度だと思いがちなのであろう。

＜未知の世界にある補聴器〜補聴器そのものについても、具体的な選び方に関しても知識がない＞

補聴器購入の際のフィッティングの必要性については、多くの人が知っていると答えた。しかし、補聴器専門店・補聴器技能者の認定制度を知っている人はあまりいない。また、補聴器の公的交付制度についても8割以上の人が知らなかった。補聴器を耳に合わせて買わなければならないと漠然とは思っていても、具体的にどのような方法で入手したらよいかということになると、あまりよくわかっていないようである。

老人性難聴に関する知識についてみると、言葉が聞き取りにくくなることは6割強の人が知っているが、高音から聞こえにくくなることは3割未満の人しか知らない。加齢とともに言葉の聞き取り能力が低下することは経験的に感じていても、高音の聴力低下など素人には気づきにくい面に関する知識は少ないことがうかがえる。

補聴器の性能、価格、デザインに対する評価をたずねた結果では、わからないと答えた人の割合が高かった。補聴器そのものに対してもあいまいなイメージしか持っていない人が多いようである。

＜補聴器に対する過度な期待の存在＞

補聴器の性能に関して、わからないと答えた人以外の回答をみると、かなりの人が雑音は多いと思っている半面、音を聞きやすくする効果はあると考えている。

また、補聴器を使っても若いころのようには聞こえないこと、高価な補聴器ほどよく聞こえるとは限らないことについては、どちらも半数以上の人が知らない。

過剰な期待を持って補聴器を買うことによって、補聴器に対する失望も大きくなる可能性がある。

＜「食わず嫌い」の補聴器〜補聴器の使用意向が低い人は、補聴器に対して具体的イメージを持っていない＞

補聴器を現在使っている人は1%であった。しかし、それ以外の人の中で、補聴器使用の必要性を感じることがある人は全体では約9%、65歳以上では14%を占めた。一方、聴力が低下しても補聴器を使用したくないという人も2割弱いた。

そこで、補聴器を使用したくないという人とそうでない人の補聴器に対する評価を比べたところ、使用したくないという人の中で補聴器に対する評価がわからないと答えた割合は高かったが、マイナスの評価を持っている割合は必ずしも高くなかった。補聴器を使いたくないと思う要因は、補聴器に対して悪いイメージを持っていることにあるというよりはむしろ、そもそも補聴器についてよく知らないことにあると考えられる。

また、補聴器を使用したくないという

人は、補聴器を使い始める年齢として80代以上をあげる人の割合が高かった。補聴器はお年寄りが使うもの、というイメージも、補聴器を使いたくない一因になっていると思われる。

<補聴器に関する知識を広めるもの〜医療関係者の情報が有力、身近な使用者の話には偏りも>

補聴器に関する知識を広めることは、生活者の正しい補聴器入手・使用を促進するとともに、補聴器使用者に対する理解を深めることにもなる。

補聴器に関する情報を得る媒体としては、新聞・雑誌の記事や広告、新聞の折り込みチラシなどをあげた人が多い。現状では、新聞・雑誌が主要な情報源になっていることがわかる。

一方、マスコミ以外では、家族や友人など身近な人の話、すなわち口コミも大きな情報源となっている。友人・知人や近所の人、あるいは親が補聴器を使っているという人も、それぞれ1割程度いる。身近な補聴器使用者から補聴器に関する話を耳にすることは多いのであろう。

家族・友人などから補聴器に関する情報を得た、という人は、補聴器を使っても若いころのようには聞こえないことや、高価な補聴器ほどよく聞こえるとは限らないことを知っている割合が特に高い。身近な人から聞く補聴器の話は、使用体験に基づく補聴器の主観的評価が中心なのではないかと考えられる。

一方、同じ口コミでも、医師や看護婦から補聴器に関する情報を得たという人は、補聴器に関して幅広い知識を持っている。医師や看護婦から補聴器について話を聞いた人は1割にも満たず、そもそも補聴器に関してかなり高い興味を持っている層であるとも考えられるが、そうであるとしても医療関係者は生活者の補聴器に関する知識を広げる重要な鍵になっているといえる。

<理想と現実、本音と建前のギャップ〜本当に補聴器が必要になったときに、思っている通りの行動をするかどうかは疑問>

聴力が低下しても補聴器を使用したくないと答えた人の割合は、70代前半の人や、聞こえにくいと感じている人で高い。つまり、補聴器が必要である可能性が高い層では、補聴器使用意向の低い人がむしろ多い。このことは、将来聴力が低下したら補聴器を使用すると言っている人々も、実際に聴力が低下したときに補聴器を本当に使用するかどうかはわからないことを示唆している。

また、補聴器の入手場所として耳鼻咽喉科をあげた割合は、補聴器を使ったことのない人では半数近いのに対し、補聴器を使ったことのある人では1割未満である。すなわち、現在補聴器を必要としていない人が将来必要となった際に、耳鼻咽喉科の門をたたくかどうかには疑問が残る。

今回は補聴器の使用経験者のサンプル数が少なかったため、彼らに関する十分な分析はできなかったが、補聴器入手の際の状況などについてもっと詳しく調査することは重要であろう。

6．今後の課題

以上の結果をふまえ、医療機関、補聴器供給者、行政、生活者などの今後の課題を提示する。

まず、耳鼻咽喉科医などの医療関係者に対しては、聴覚や補聴器に関する情報の生活者への発信源となることを望む。前述の通り、補聴器を購入する際にはまず耳鼻咽喉科に相談したいという人が多い。また、医療関係者から補聴器に関する情報を得た人々は、幅広い知識を持っている。耳鼻咽喉科には、補聴器について気軽に相談できる窓口として、より身近な存在になってほしい。また、補聴器外来など、より専門性の高い相談機関の充実も今後一層求められる。

一方、補聴器のメーカー、販売店などの補聴器供給者にも、補聴器に関する情報のより積極的な提供を期待する。生活者にとって補聴器は、未知のもの、あるいは雑音が多い、値段が高いなど良くないイメージを伴うものである場合が多い。また、補聴器に関して漠然としたイメージしか持っていない人は補聴器の使用意向も低い。より質の良い、そして安価な補聴器の供給が求められるのは当然であるが、それだけではなく、補聴器の効果の限界なども含めてありのままの現状を生活者に知らせることが重要と思われる。また、補聴器のフィッティングをどこでどのように行ったらよいかといった具体的な選択・入手方法についても、詳細な情報の提供が望まれる。

行政は、補聴器に関する情報の中でも特に補聴器の交付制度について、生活者にもっと知らせる必要がある。また、市町村などによって開催される補聴器相談や、現状では受けている人がほとんどいない地域の健康診断での聴力検査の機会も増えるとよいであろう。

最後に、生活者に対しては、耳の健康にもっと関心を持ち、聴力検査なども定期的に受診することを提案する。また、聴覚や補聴器に関する情報は、周囲の人の口コミや経験だけに頼るのではなく、専門家を含めた確実な情報源からも幅広く収集するよう努めることが必要である。

（研究開発部　副主任研究員）

【謝辞】

本稿で紹介したアンケート調査は、奈良県立医科大学医学部の細井裕司教授と共同で実施したものである。また、筑波技術短期大学聴覚部の大沼直紀教授にも調査研究を進める上でご指導を賜った。紙上を借りて、両氏に感謝の意を表す。ただし、本稿の内容に関する責任は筆者に帰する。

【注釈】

＊1　6分法の平均聴力レベルとは、周波数500Hz、1000Hz、2000Hz、4000Hzの純音聴力レベル（デシベル）をそれぞれa、b、c、dとした場合に、次式で算出される値である。

（a+2b+2c+d）/6

なお、6分法のほかに4分法（次式）などの算出方法もある。

（a+2b+c）/4

【参考文献】

・大沼直紀，1997,『あなたの耳は大丈夫？』PHP研究所

・難聴高齢者のサポートを考える研究会，2001,『難聴高齢者サポートハンドブックー耳が遠くなったときの介護・生活支援・補聴器ー』日本医療企画

・日本聴覚医学会，1999,『聴覚検査の実際』南山堂

・細井裕司，2001,「補聴器のフィッティングと効果　成人」，野村恭也ら『補聴器と人工内耳』中山書店

・水野映子，2000a,「高齢者の聴覚に関する問題点への対応策（上）ーユニバーサルデザインの視点からー」『LDI REPORT』9月号，118

・水野映子，2000b,「高齢者の聴覚に関する問題点への対応策（下）ーユニバーサルデザインの視点からー」『LDI REPORT』10月号，119

・水野映子・大沼直紀，2001,「高齢者の聴覚情報補償に関する意識調査と対応策の検討」『電子情報通信学会技術研究報告（教育工学)』信学技報，100-600

・水野映子，2002,「誰もが暮らしやすい生活環境づくり」，加藤寛・丸尾直美・ライフデザイン研究所『福祉ミックスの設計』有斐閣